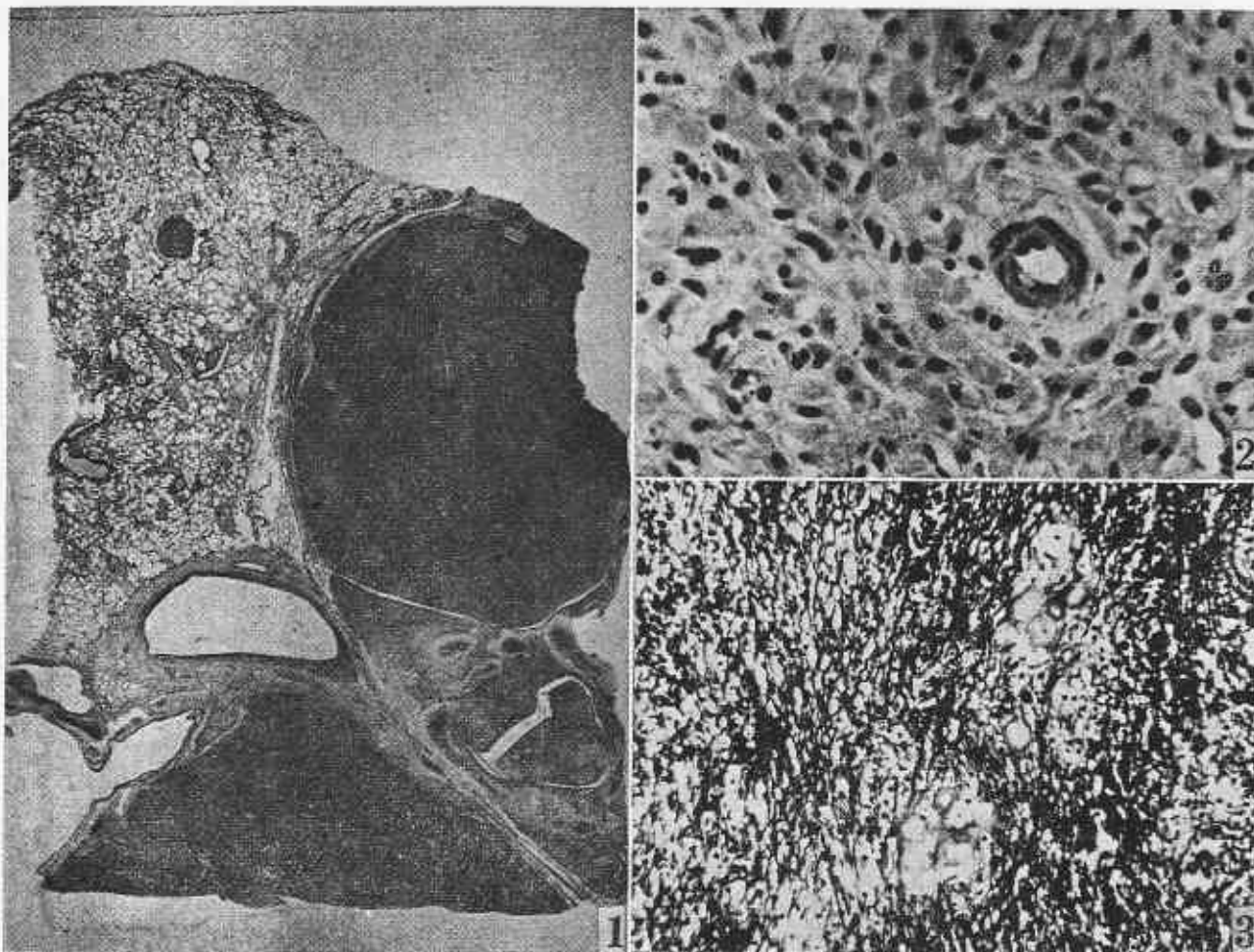


日 生 研 究

第 9 卷 昭和 38 年 6 月 第 6 号



馬に認められた肺の原発性軟骨形成肉腫

北大獣医学部比較病理学教室出題・第 2 回獣医病理学研修会標本 No. 23

成馬，1956 年 9 月 19 日札幌屠場にて屠殺，臨床的事項不明。

右肺横隔膜葉体部鈍縁に近く，表面より灰黄白色に透視し得る長さ約 30 cm 幅 12 cm の表面に少しく膨隆緊張する限局巣が認められた。限局巣は硬度鞏な大小の腫瘍結節集団よりなる。

1) は肺腫瘍部切片のルーベ拡大 (×35) 像。H.-E. 大小の類円形腫瘍結節は肺組織と限界鮮鋭に境され，大型のものは結合組織性被膜により包まれる。腫瘍結節辺縁部ではしばしば圧扁された細気管支腔が見られる。右下隅の気管支腔周囲には不整形な軟骨板が認められ，腫瘍組織に移行している。左下隅腫瘍結節には粟粒大の透

明斑 (未分化な軟骨細胞集団を容れる) の散発が認められる。

2) 腫瘍実質，H.-E.，×260。腫瘍の主体は未分化組織で，実質細胞は線維芽細胞に類似する (軟骨母細胞)。核はほぼ楕円形で，原形質を富有し，その境界やや不鮮明。結節内には多数の毛細血管が良く発達し，時に図の中央にみられるような小血管も認められる。

3) 腫瘍実質，AZAN 染色，×130。基質は線維成分に富む。2カ所の淡明部は前記透明斑に一致する部で，節状の網工内に未分化な軟骨細胞を容れている。

病理組織学的診断：気管支粘膜下組織に存する軟骨膜を中心とした間胚葉性細胞に原発したと思われる軟骨形成肉腫。